高下駄の緒をあやうくふみしめながら、私はそこに四年の間通つた。四年を卒業したとき、日本の小学校令が改正されて六年に変り、それと同時に、三かゝの尋常小学校は石段を降りて、下の高等小学校と合併した。

私（筆者）もこの三かゝの尋常小学校に二年まで通学した。私は明治四十年四月に一年生として入学したが、二年の中頃、今の佐伯小学校の校地に建てられた新校舎へ移つたのである。

一年生の頃のことはよく覚えていないが、楼門の前の石畳を上り降りするのが怖しく、殊に雨降りの日はこつてころび泣いたことがある。教室は今は無いが裏の池に近い所にあつてうす暗く、室の中に柱が幾本かあつた。雨の日は雨もりがして、先生がバケツをすけていた。先生は飯沼善三先生であつた。学芸会に何人かと一緒に出て唱歌を歌つたことを覚えている。

その頃三月が終りに張り出しというのがあつて、各教室の前に進級した児童の名を書き、その上に甲、乙、丙とその子の成績を記入して張り出していた。成績の特によい子には優等と記入されていた。私どもはこれを見て、甲上りだ、乙上りだ、丙上りだと各自の成績を言いあつていた。今の通信簿の代りであつたのだろう。

（この項終り）

御一六九

神慈の太刀

高木嘉吉

（佐伯市蒲江丞）

十月八日、大分市に上杉謙信展を見学した。之については大分合同新聞に詳細に紹介されているが、私は同行した会員と共に、私なりに感懐を抱いて詳細に観覧し、天慶、天正の昔に没入する一時を持つた。

此の展覧会の一環として、県内の神社から貴重な名品逸物が出品されていたが、中で私の眼を奪い足を釘付けにして、時のたつのを忘れさせたのは、宇佐神宮出品の神慈の太刀であつた。二尺四寸六分の細身の太刀は、神韻縹々、其の身に秘めた長い歴史と、数々の事件を物語るかの様であつた。

此の太刀は、諸方惟栄から佐伯惟重（惟定の息）まで佐伯氏に所蔵され、佐伯氏に関係が深いので、次の二篇の関連記事を掲げて参考に供したい。

大友興廃記（〇〇の巻）神慈太刀の事

春永二年平家一門帝都を去つて九州の地に着かせ給ふ。爰に豊後の住人緒方惟栄平家一門を九国の内を追出し軍忠浅からず。之に依つて義経御感深し。夫に依つて数通の御感状を被下、剰へ神慈の太刀を拝領す。

抑も神慈の太刀は四十三代元明天皇の御宇和銅元年戊申に宇佐八幡の瑞相を以て宇佐に何国とも知れざる童子一人来り、逆び槌を打つ。然も上手にて太

刀出来して彼の室に帰る。不審に思い跡を慕い見るに宇佐の御室前にて見失ひぬ。正しく八幡大菩薩の打ち給ふ槌かと殊勝所に勅じおわんぬ。

大明神より廿四代佐伯惟定の息惟重が時にも奇特有り。惟重伊勢の国居住の時元和九年の夏剛の為京都に上らせらる。其の夜惟重の息女急に病に侵され絶入す。惟重臣下に一人の老人有て神息の太刀を京都へ登せらる其の故にやと伸ぶ。惟重家臣俱に之に同じ夜を日に継で人を上せ大津の夜にて追付き太刀を執り帰り伊勢の国にて此の太刀門に入るや否や息女快気して平日の如し。是家を守る太刀の奇特なり。

昭和十六年五月　日、毎日新聞所載

名刀綺談　七百五十年ぶりに神息の太刀還る

神殿から忽然と消えた神宝、神息の太刀が、近く復興工事が竣工する宮幣大社宇佐神宮に還って来るといふ名刀綺談。

この太刀は奈良朝和銅年間に宇佐八幡の社殿神息が、八幡の神霊に感じて打つたといはれる神品で、平家を壇之浦に滅亡した源氏の一隊諸方三郎惟栄ら平家を壇之浦に滅亡した源氏の一隊諸方三郎惟栄ら平家の残党を探して焼打をかけ、御正体の黄金の延板三枚ともに持ち帰り、そのまま行方が知れずに居たが、大日本刀剣会長林銑十郎大将によつて発見され、大将から宇佐神宮奉賛金総裁河合操大将に話があり、在京県人会や奉賛会などと協議の末、奉賛会から三万円を支出して、現所蔵家の但馬の国竹田町林田督磨氏に謝礼をし、過般東京で河合大将金光尊相後藤文夫氏の臨席して、神息の太刀譲渡式を挙げ、上京中の離庭知事とともに、奉賛会来京文部伊藤主事が護つて十八日帰県、宇佐神宮に奉還することになつた。

この太刀は長さ二尺四寸六分、小丁字乱れで刀身の重ね厚く鍛造りになつて反りがあり神息の銘が切り、重要美術品に指定され、時価三十万円と称されているが、消息不明の七百五十年間をどうしていたか、諸方惟栄が持ち出して大将義経に差し出したとこの、義経は惟栄に与えたと東鑑や大友興廃記に記されているが、飯田文次郎氏の調査によると、惟栄の末裔佐伯氏がそれを伝えて伊勢の藤堂家に仕へ、寛永年中伊勢神宮に此の太刀を奉納した。当時の横目として実物の太刀は神宮の社家藤波大夫の手に移つていたが、大正八年後裔藤本重樹氏から飯田氏が譲り受け、更に林田氏の愛刀と交換したといい経歴で、七世紀半の長歳月を経て神宮に奉還されたわけである。神宮当局では此の報に大喜び、近く厳粛な奉献式を行う予定である。

以上の様に神息の太刀は寿永から寛永まで約四百六十年余、佐伯氏が所蔵していたものである。興廃記の記事が実物で裏付けされ、和銅元年から一千二百六十余年を経た今日、日本で最も古い一振の此の神品を拝し得たことは望外の幸であつた。

（おわり）

二階堂辰男氏、去る十二月十九日逝去

今夏来病気療養中であつた本会の賛助会員、二階堂書店主の二階堂辰男氏は遂に去として逝かれた、享年六〇才。

本会に対しても数年来、佐伯史談会の研究活動に理解と協力をいただき、毎年多額の賛助寄附を下さつていました。御冥福を祈りましょう。（N生）